

# 戦後の復興も馬たちとともに

馬なしでは成し得なかった戦後の復興。  
 十勝では昭和四十年代頃まで、馬たちがあらゆる  
 場面で人々の暮らしを支えていました。

## 十勝の経済を担った馬たち

### 山で、畑で、苦業とともに

昭和二十年の敗戦とともに、  
 軍馬の時代は終わりを告げます。  
 戦後の混乱の中で人々を支えた  
 のは、やはり馬でした。

戦後の農地改革によって地主  
 制度が崩壊すると、農民は自らの  
 耕地を持てるようになりました。  
 土地を得た農民たちが真っ先に  
 したのは、馬小屋を建てること。  
 農業の復興のため、輸送や移動  
 のため、馬は欠くことのできな  
 い存在でした。

プラウを使った馬耕では大き  
 く土を起すために二頭びぎで  
 作業を行いましたし、馬の病気  
 や出産に備え、換え馬も必要で  
 した。そのため、どの農家でも  
 三〜四頭の馬が飼われていまし

た。春になると子馬が生まれま  
 す。この子馬を売れば、農家の  
 生計の足しにもなりました。

農村の婚礼は農閑期に行われ  
 るのが通例だったので、冬の花  
 嫁は馬そりに乗ってやってきま  
 した。村に産婆さんを連れてく  
 るのも、病人を運ぶのも馬。暮  
 らしのあらゆる場面に馬の姿が  
 ありました。

農村だけではありません。漁業  
 では、漁船を浜に上げたり、定  
 置網を巻き上げるのに馬力を利  
 用していました。林業の現場で  
 は、山から狭い林道を伝って材  
 木を運び出すのが馬の仕事でし  
 た。厳寒の冬も黙々と働く馬た  
 ちは貴重な労働力であると同  
 時に、大切な家族でもありました。

### 市街地を闊歩した馬たち

昭和三十年代、帯広の市街地に  
 は数多くの馬車や馬そりの姿が  
 ありました。運送業者の動力も、  
 まだ馬が主役だった時代。駅に着  
 いた荷物や、家庭から出たゴミ、  
 し尿を運ぶのは馬たちの役目。バ  
 スや乗用車の脇を、大きな荷物を  
 載せた荷馬車が走る光景は、帯広  
 市民にとって見慣れた日常風景  
 でした。

当時の帯広の風物詩とも言える  
 のが「馬ふん風」。冬の間に馬た



昭和33年、帯広市西5条南10丁目の踏切を渡る馬車。



売られていく2歳馬。左上の建物は川上外科、右上は帯広駅前にあった北海道ホテルの前身。



帯広市西2条通り10丁目あたりを横切る石炭馬車。(写真/いづれも荘田喜與志)



馬そりに乗った花嫁。昭和33年、清水にて。



昭和31年、薪を積んだ荷馬車が帯広の駅前を行く。

ちが雪道に落とした馬ふんは雪の  
 下で凍り、春の雪解けとともに地  
 表に現れます。これが細かなチリ  
 となり、春の乾燥した風に乗って  
 飛散したのが馬ふん風です。衛生  
 上の問題が指摘され市民から苦情  
 が出たために、馬のお尻の下に袋  
 が吊るされるようになり、以来、  
 道を汚すことはなくなりました。

馬がいて当たり前だったこの時  
 代、馬に関わるさまざまな商売が  
 成り立っていました。働く馬にな  
 くてはならない蹄鉄屋、荷馬車の  
 製造や修理を担う馬車屋、馬具を

扱う馬具商などほどの町にもあ  
 り、馬耕用農機具の製造・販売業  
 も盛業でした。また、帯広市内  
 には何軒もの馬宿があり、馬市が  
 開かれると、馬を連れてやってく  
 る人々や家畜商たちが賑わいまし  
 た。売買が成立した馬は、帯広駅  
 から貨車に積み込まれ、本州各地  
 へと送られていきました。

馬が十勝の経済の一翼を担って  
 いた。そんな時代があったのです。



寒さ厳しい陸別の冬山で、材木を運び出す馬そり。



プラウを使った馬耕が行われていた昭和31年の光景。

## 神田日勝が描いた十勝の馬

### 疎開者として東京から鹿追へ

十勝の馬文化を語る時、すぐに思い浮かぶ絵があります。画家・神田日勝の描く幾頭もの馬たちです。初期の作品「瘦馬」に始まり、絶筆「馬」まで、日勝は十勝の開拓と農耕を支えた馬の姿を描き続けました。



青年時代の神田日勝、若と。

日勝は昭和十二年、東京の練馬に生まれました。昭和二十年、両親が東京空襲の被災者のために組織された「拓北農兵隊」に応募。当時八歳の少年だった日勝が家族とともに鹿追に入植したのは、皮肉にも終戦の前日、八月十四日のことでした。

北海道開拓という明治期を思い出しがちですが、未開地の開墾は昭和期になっても尚、続いていました。戦中戦後、本州で被災し家を失った人々が、北海道に新天地を求めて続々とやってきました



数ある日勝作品の中でも、見る者の心に迫る傑作「馬（絶筆・未完）。1970年。（神田日勝記念美術館蔵）。

が、馬を買うお金もなく、ほとんど素手で荒地と格闘する日々。慣れない力仕事と貧しい暮らしに耐えかね多くの人が脱落していききました。そんな中、神田一家は開拓の厳しさと向き合い、この地に根を下ろしたのです。

### 馬の絵に託された思い

中学を卒業後、日勝は営農の担い手として働き、その傍ら、絵を描き始めます。ベニヤ板にペインティングナイフで描く独特の画風から生み出された馬の姿。そこには、ともに土と苦悩する大切な家族に注がれた日勝の慈しみの眼

差しが感じ取れます。代表作「死馬」では、克明に描かれた体毛の一本一本から、湿った汗の匂いがいまだに立ち上っているかのようです。

十勝を代表する画家としての評価が高まり、これから期待された昭和四十五年、日勝は腎盂炎による敗血症を併発し、三十二歳という若さで亡くなりました。この時、彼が最後に描こうとしていたのも馬でした。前半身だけが描かれた「馬（絶筆・未完）。描かれなかった空白の部分埋めるのは、馬とともに生きた十勝人の馬に寄せる心情に他ならないのかもしれない。

## 神田日勝記念美術館

神田日勝ゆかりの鹿追の地に、平成5年に開館。農民であり画家であった日勝の代表作と素描・遺品などを展示している。館内には無料音声解説ガイドの貸出もあり、同館の概要や神田日勝の生涯について聴くことができる。



住所／鹿追町東町3-2 電話／0156-66-1555  
開館時間／10時～17時  
休館日／月曜、祝日の翌日、年末年始

## 馬力から、トラクターの時代へ

### 急速に姿を消していった馬たち

昭和三十年代後半になると、十勝にも機械化の波が押し寄せます。農作業の動力は馬力からトラクターへ。長年、馬と苦勞をともにしてきた農家の人々も時代の波には逆らえず、次々と馬を手放してトラクターに切り替えていきました。

街中を走る荷馬車も急速に減っていきました。雪深い冬には馬そりによる輸送が活躍する余

地がまだ残されていました。これもやがてトラックに取って代わるようになります。仕事を失った馬たちは見る間に姿を消していきました。

昭和三十年には約六万五千頭いた十勝の馬たちは、それをピークに、昭和四十年代後半にはついに一万頭を切るまでに減少します。これまで馬を育てていた牧場の多くが、馬に代わって牛を飼うようになりまし。これこそが、その後の「酪農王国・十勝」の序章へとつながっていったのです。



昭和57年に音更町十勝温泉郷に建立された「十勝馬唄」の歌碑。

### ばんえい競馬に継承される馬文化

十勝の開拓が始まってから高度成長期までの約百年、何をするにも馬なしでは暮らせない日々がありました。馬とともにあった時代を知る人は、今尚、馬への特別な思いと感謝の念を忘れていません。十勝を代表する民謡として知られる「十勝馬唄」も、馬たちがいた十勝の原風景を偲んで、昭和

四十一年に発表されたものです。懸命に農具や荷車をひき、人のために尽くした馬たち。その昔日の姿を、唯一今に伝えるのが、ばんえい競馬です。戦後間もない昭和二十一年に公営競馬となつて以来、七十年にわたって継承されてきたばんえい競馬は、現在では十勝帯広でしか見ることのできない北海道遺産として守り継がれています。

## トラクターの時代を描いた絵本『赤べえ』



十勝のとある農家で長い間、農耕馬として家族と苦勞をともにしてきた「赤べえ」。近所の農家が次々トラクターを買うようになって赤べえを手放すまいとしていた一家ですが、いつに決断を下すことに。農家の少年・勇作の目を通して愛馬との別れを描いた絵本『赤べえ』。ここに描かれた光景は昭和30年代から40年代にかけて、北海道はもとより日本各地で見られていたものです。本書は全道の小学校に配本され、馬が暮らしの中だった時代を後世に伝えています。

\* 原案は米水道裕さんの演劇脚本「斑馬の嘶き」、作者はエッセイストの旋丸 巴さん（現在NPO法人とかち馬文化を支える会専務理事）、挿絵はばんえい競馬初の女性調教師でもある谷歩（あゆみ）さん。平成16年、十勝馬車振興会、十勝農業協同組合連合会、北海道鞍用馬振興対策協議会発行。